（様式）

会議議事録

事業名	令和６年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業 （２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進
代表校	一般社団法人全国専門学校教育研究会

会議名	第 4 回産学連携推進員育成講座開発委員会
開催日時	令和 7 年 1 月 14 日（火）15:00～17:00
場所	オンライン
出席者	事業責任者：岡村　慎一　計 1 名 委　　員：柳田　祐大、森川　和哉、土井　宏美、林　透、藤井　貴志、三村　隆男、及川　源太、島田　勝彰　計 8 名 請負業者：飯塚　正成　計 1 名 オブザーブ：キャリアリンク　小池、木根　計 2 名 合計 12 名
議題等	○本年度成果物について ----------柳田 令和 5 年度に取り組んだサンプル教材はすでに完成済み。これについては問題なし。 検証講座の状況としては、9 月と 12 月の 2 回実施済み。 今日は、その振り返りとしてフィードバックミーティングを行う。 1 回目の検証講座については、すでに前回の会議で共有済みのため、省略。 本日の目的は、2 回目の検証講座を中心に振り返り、改善点などを話し合う。 実施日と場所 12 月 9 日・10 日に京都で開催。 1 回目の講座の内容が多かったため、消化不良を防ぐために到達目標を調整。より実践的な形で 2 回目の講座を実施。 検証対象の絞り込みとしてクリエイター系分野に対象を絞って実施。 講座の内容は、産学連携における課題や改善点の例示。企業連携にフォーカスしたシナリオ分析。評価基準と評価方法を確定し、次年度のファシリテーター養成講座につなげることを目指した。 講座の目的として産学連携を推進する先生方が、企業と協働する意義や価値を再確認する。産学連携をキャリア教育の視点からアップデ

	ートできるようにする。他の学校の先生たちとグループワークを通じて、それぞれの取り組みを共有。 　研修の運営については、日程・会場は事前の予定通りに実施。当日の進行管理はキャリアリンクの小池さんと木根さんに担当してもらった。 　ペーパーレスで実施し、パソコンと Google ドライブを活用。紙の資料は使わなかった。 参加者は 9 名（法人・学校名は非公開）。 ----------小池 　研修の目的は、キャリア教育の視点を取り入れた講座を通じて、受講者が次の 2 点を得られるかを確認すること。 　他校の教職員との交流を通じた気づき（協働的な学び）や研修の内容と手法が、対象者に適しているかを正しく判断するため、2 回に分けて検証を実施。 　受講者の満足度や内容の理解度は高く、狙っていた目的は達成できたと判断。「自分のやるべきことが明確になったか？」という質問に対しても、高評価を得られた。 　第 1 回のフィードバックを受けて、事前学習やワークシートの見直しを実施。第 2 回は、次年度以降の展開を見据え、対象者を限定。結果として、より深い学びが可能になり、受講者の満足度が向上。 　研修の目標設定をスケールダウンし、より実践的な内容に変更。 　以前は、カリキュラム全体のデザインなど広範な議論があったが、今回はキャリア教育に焦点を絞った。 　学生の資質能力育成とディプロマポリシーの連携を明確化や企業連携の価値を考える場としての必要性を強調したことがアンケートでも評価された。 　研修の効果と受講者のフィードバックとしては、受講者の学びがより具体化。「自分の現場で何をすべきか」が明確になった。他の学校の取り組みとの比較で視野が広がった。研修の焦点を絞ったことで、内容の濃度が高まり、交流の質も向上。 　前回の研修と比べ、「課題解決のプランニング」の部分をオプション扱いにし、内容を整理。その結果、学びの焦点化と時間的な余裕が生まれた。 　今後の検討事項は研修後のフォローアップが重要だ。8 時間の研修だけでは、学びを実践に落とし込むには不十分。2 か月後のフォローアンケートを実施し、実際の変化や課題を確認する。 　来年度以降の研修の形をどうするか？今回の研修を「アドバンス研修」とするか、別の研修にするか検討。事前学習の充実が必要。研修

	の目的や達成目標をより明確に示し、受講者に意識してもらう。 ----------森川 　学園として 2 名が参加し、研修後に話を聞いたところ 非常に満足度が高かった。研修の内容が充実しており、大きな学びがあった。 　学園内には多くの学科があり、自分の担当学科以外のことを知らない先生も多い。横のつながりやサポート体制が限られているため、他校の状況を知れたのは貴重な機会だった。特にデザイン系の学科では、常勤教員が 10 名ほどしかおらず、1 人 1 人の役割が限られるため、他の学校の取り組みを学べたのは大きな収穫だった。 　研修の場では盛り上がるが、時間が経つと日々の業務に追われ、学びが薄れてしまうことが多い。そのため、一定間隔でのフォローアップが必要だと強く感じた。 ----------柳田 　私は、2 回の研修に参加し、学びが深まった。 　森川委員の話と重なる部分もあるが、産学連携の取り組みは各学校で進めているが、情報共有が難しいと感じた。学科単位での視点になりがちで、他学科や他校の取り組みについて知る機会が少ない。 管理側としても、自分の学校の話はできるが、普段関わりのない学科や学校についてはアドバイスが難しい。 　今回の研修では、クリエイター系の分野に絞ったことで、ジャンルが近い先生同士の情報共有がスムーズにできた。今後フォローアップをしていくにあたっても、方向性や現状、過去の取り組みを共有できたことが大きな成果だった。 　今回の産学連携推進員育成講座は、2 回の検証を経て、ある程度完成した形になっていると感じる。フォローアップの追加も含め、今後の展開の方向性が見えてきた。委員の先生方の意見を聞き、さらに取り入れるべき要素があるか検討したい。 ----------小池 　前回は時間が足りず申し訳なかったが、今回はしっかり時間を確保できた。そのおかげで満足度が向上したと考えられる。 　研修のレベル感を確認するためのポイントとして、受講者が最後に挙げた「次のアクション」を参考にするのが良い。受講者が今後どんな行動を取るつもりなのかを見れば、研修の内容が適切だったかどうかが判断できる。フォローアップを通じて、実際にどれだけ行動に移せたかを見ることが重要。 　もし「もう少しこういう行動を促したかった」「ここまで引っ張り

	たかった」という意見があれば、研修内容の見直しが必要かもしれない。逆に、受講者のアクションが期待通りであれば、今回の研修内容で問題ないと確認できる。 　ワークシートは当初5種類準備し、最終的に3種類に減らした。事前学習用にサンプルを提示し、自校の課題感を書いてもらう形式だった。サンプルがあったため、事前学習は比較的スムーズに進んだ。 　研修では、シナリオを読んだ後に「うまくいっている点」を書き出す活動を実施。サンプルを提示すると書く内容が限定されるため、あえて指示のみで対応。その結果、何を書くべきか、レベル感、理想像vs 現実解の迷いが生じた。 　評価計画なら「どのタイミングで、どのように評価するのか」を具体的に記述。間違いではないが、限られた時間内でのアウトプットに課題があった。 ----------林 　学習評価の部分は サンプルなしでも書ける はず。研修に参加するレベルの人なら、ある程度 自分で書く力が求められるのでは？説明不足が問題 だった可能性も考えられる。 　研修の リテラシー（経験値） に差があり、理解度に影響した可能性がある。参加者によっては、説明を丁寧にする必要があったかもしれない。 　研修の「アップデート」を考えるなら、どのように改善するか？サンプルを与えすぎると自主性が損なわれる可能性 もある。ある程度「考えさせる」仕組みを残すべきではないか？ ----------小池 　研修では アセスメントとシナリオ の2つが主な検討項目だった。サンプルがなくても記述できるはずだが、丁寧な説明が足りなかったかもしれない。研修初心者の参加者 もいたため、説明の工夫が必要だった。 　サンプルの提示が 必要かどうかは議論の余地あり。ただし、最低限の リファレンス（参考例） は必要だと考えた。過去の研修成果物を厳選・統合して参考例を作成 するのが良いのでは？「正解」を示すのではなく、適切な方向性を示すものとして用意するべき。 　受講者に考えさせつつも、インストラクション（指示）を適切に設計する。成果物の共有や説明を工夫し、研修の目的に合った形にアップデートする。最終的には「みんなが適切なアウトプットを出せる状態」にするのが理想。

（様式）

	----------柳田 　これまでの 2 回の検証講座で使用したサンプルを基に微調整する。目安として約 1 ヶ月以内 に完成版を作成する予定。 　納品の形態はパワーポイントと動画と PDF でよいのか。 ----------飯塚 　その内容で問題ない。報告書はワードで作成し、研修の趣旨、カリキュラム情報、アンケート結果等を含めて 20 ページ程度で想定している。 〇ファシリテーター養成講座の方向性 ----------柳田 　ファシリテーター養成講座開発は次年度だが、今年度内に方向性を決定し、報告書としてまとめる予定。 　産学連携を推進する人材を育成することが目的。自身が直接進めるのではなく、学内や学科単位で推進する人材を育成することが重要。 　必要なスキルはコミュニケーション力やコーディネート力。 　専門学校は地域に根付いた教育機関であるため、産学連携を地域活性化・地域貢献につなげる視点を持つファシリテーターの育成も重要。 　現状、スポット的な連携（例年通りの継続）が多い。新たな連携の開拓や、より広い視野での産学連携を推進する人材が必要。 　研修講座でも課題に挙がった 評価基準の整備が必要。例えばルーブリックの作成や既存評価基準の見直し・ブラッシュアップ を検討。 　次回の会議で意見を集約し、最終的に報告書にまとめる予定。 ----------飯塚 　文科省の事業として、作り上げた成果物が自立し、継続できる形にすることが重要。 現状の研修プログラムは優れたものだが、限られた人に依存してしまう課題がある。 「作りっぱなし」にならないよう、継続のための工夫が必要。次回までに、継続運用の工夫について具体的な提案を考えるべき。 ----------柳田 　動画コンテンツ化（ライブで行う形にこだわらない）。 　対面研修の継続（研修を正式なプログラムとして位置づけ、定期的に実施）。 　オンラインと対面のハイブリッド型（参加者の利便性を考慮）。

（様式）

	----------飯塚 　対面での研修が効果的であり、継続的に実施するのが理想。研修を通じて仲間を増やし、分野を横展開していくことが望ましい。 具体的な運営方法の検討。 　パワーポイントのスライドにナレーションを加えるなど、教材としての活用を検討する。講師などをふくめた運営体制をどうするか？ ----------柳田 　対面とオンライン、どちらの形式が適切かを議論する。 　最終的に、成果物の運営方法と展開方法を明確にする。 　委員の先生方には、研修の運営・継続方法について具体的な意見を次回会議で提案してもらう。 ----------及川 　何らかの教員認定のしくみを作り、全専研の加盟校内で育成する仕組みを導入できないか？ 　「認証システム」のような形で、研修を受けた講師がさらに次世代の講師を育成していく仕組みを作ることも検討可能では？ 　この方法なら、研修内容が継続的に伝承され、安定した運用が可能になる。 ----------柳田 　「正解」は一つではないため、複数の案を検討するのが望ましい。 　対面・オンライン両方の可能性を考えるべき。状況に応じて柔軟な実施方法を取れるようにするのが理想。 　今すぐの決定は難しいため、次回の委員会までに具体的な案を考える。 　次回の議題は、ファシリテーター養成講座の方向性と研修の実施・継続方法のアイデア出しとしたい。 〇第５回委員会 ・令和 7 年 2 月 14 日（火）15～17 時　高松予定
配布資料	・次第

以上